天皇報道に関する

緊急声明

ソウルオリンピックたけなわであった昨年（一九八八年）九月、天皇倒れるとの報道は列島を駆けめぐった。多くの人々が予言していた通り、その日以来、ご病状報道と自粛の嵐がわれわれの生活を脅かすようになった。昭和天皇が何を思いながら逝ったかは、いまとなってはわからない。確かなことは彼が最後まで多くの人々に多大な迷惑をかけつづけたということである。

ピープルズ・プラン二十一世紀の本格的な旗揚げであった第一回全国実行委員会は、このようななかで開かれた。以下の声明はその参加者一同の名において出されたものである。

（編集部）

わたしたちはアジアをはじめとする世界中の人々と未来を共有できるような社会をめざす「ピープルズ・プラン二十一世紀――アジアとともに未来をつくる」を計画しています。今日はその実行委員会の結成のために集まりました。今日の日本には私たちの願いに反する出来事がたくさんあります。そのひとつとして天皇裕仁（ヒロヒト）「重体」という状況下での報道や、行政機関の尋常でない動きがあります。私たちはそうした動きに憂慮と反発を覚えずにはいられません。

九月十九日の深夜以来、新聞、テレビなどのマスコミは相当のスペースと時間を割いて、天皇裕仁の「御病状報道」を行なっています。新聞は連日一面トップ、テレビも他の番組の進行状況などおかまいなしに深夜にいたるまで詳細な病状報道を繰り返しています。政府は「政教分離」といいながら、極めて宗教色の強い「剣璽渡御の儀」（天皇の地位の象徴である宝剣と曲玉を新天皇に伝える儀式を国事行事として行なう方針を固めたといいます。

私たちは、こうしたマスコミの洪水のような報道や政府の姿勢に強い違和感を感じます。天皇の病状をなぜ、私たち皆が毎日毎日心配しなければならないのでしょうか。政府の意向を受けた自治体による病気見舞いのための記帳所の開設、各地での催し物、

パレードの自粛など、職場・学校・地域などさまざまなところで、天皇の病状があたかもすべての人々の一大事であるかのような事態が相次いで引き起こされています。

私たちは自分たちの暮らしのなかに天皇の病気を理由に権力がヅカヅカと踏み込んでくることに恐怖感を感じないではいられません。

六十年ぶりに訪れようとしている天皇の代替りに直面しようとしているいま、私たちはもっと冷静に「昭和の六十三年間」を振り返ってみるべきではないでしょうか。イギリスの新聞が「連合国の捕虜が拷問され、餓死していくなかで、天皇は何もしなかった」（二十一日付）と報道したことに、在英日本大使館は「天皇陛下を中傷するもの」として抗議したと伝えられています。私たちは日本大使館のこうした姿勢に深い疑問をもちます。天皇裕仁が戦前・戦中の二十年間、大元帥として、陸海軍を統帥していたことは否定しようもない歴史的な事実であります。かつての戦争に天皇裕仁が何の責任も無いなどという主張は論外でしょう。また「天皇陛下の御為」との名目のもとに行なわれた戦争にかりだされ、強制連行され、とりのこされ、いまなお日本の侵略戦争の傷跡に苦しみながら生きている人たちが国内にも少なくないのです。

私たちは「天皇の御容体」のみを関心事とするのではなく、「昭和」の六十三年間の日本とアジアの関係を冷静に見つめなおしたいと思います。かつての侵略戦争はもちろん現在の「経済援助」をはじめとする日本とアジアの関係のすべてがアジアの人々に強い反発を招いていることを念頭に置くことが必要です。私たちがアジアの人々と共に未来を作るためには、彼らと共有できる歴史認識をもつことがまず前提とされなければならないのはないでしょうか。

そうした観点から、私たちは現在行なわれている過剰な天皇の病状報道や、政府、自治体が、職場・学校・地域などで進めている天皇の存在を神聖化し、私たちを一方的にひとつの方向に仕向けるような動きに抗議し、それに同調していく人々が少なくない状況に深い憂慮の意を表明します。また、天皇の死とともに天皇賛美や追悼の強制がさらにエスカレートしていくことが決してないよう政府、自治体、報道機関に対し、つよく要求するものです。

一九八八年九月二四日

ピープルズ・プラン二十一世紀

――アジアとともに未来をつくる

第一回実行委員会参加者一同